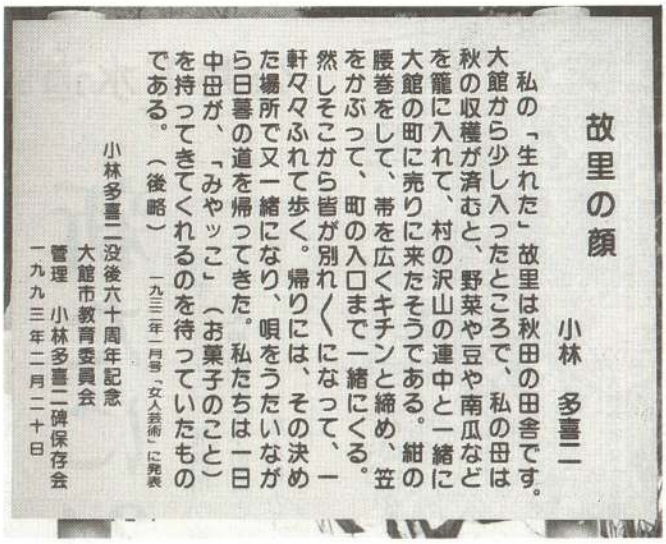
# プロレタリア文学の旗手 小林多喜二

# 60年の時間（とき）を越えて



故里の顔

小林　多喜二

私の「生れた」故里は秋田の田舎です。大館から少し入ったところで、私の田は秋の収穫が済むと、野菜や豆や南瓜などを籠に入れて、村の沢山の連中と一緒に大館の町に売りに来たそうである。紺の腰巻をして、帯を広くキチンと締め、笠をかぶって、町の入口まで一緒にくる。然しそこから皆が別れ〳〵になって、一軒々々ふれて歩く。帰りには、その決めた場所で又一緒になり、唄をうたいながら日暮の道を帰ってきた。私たちは一日中田が、「みやッこ」（お菓子のこと）を持ってきてくれるのを待っていたものである。（後略）　（九三一年一月号「女人芸術」に発表）

小林多喜二没後六十周年記念
大館市教育委員会
管理　小林多喜二碑保存会
一九九三年二月二十日

↑多喜二の生家跡に建てられた文学碑。「みやッこ」という言葉は、幼いころに聞き覚えたのでしょう。作品の中に使われた方言の数々は大館色を強くにじませています。

小林多喜二

明治三十六年十月十三日、多喜二は下川沿村川口（現大館市川口）で生まれました。父末松、母セキ、二男三女の長男です。当時の小林家は、耕地八反歩の自作兼小作の暮らしでしたが、明治四十年十二月、北海道小樽でパン屋として成功していた末松の兄の招きで、一家は小樽へ移住します。

多喜二は、小樽商業学校へ進んだころから芸術に関心を寄せ始め、大正十年、小樽高商（現小樽商科大）へ入ってから、志賀直哉に傾倒・私淑するようになり、その影響下に小説を創作し始めます。高商卒業後、多喜二は北海道拓殖銀行札幌本店に勤務しますが、創作活動は続き、ゴーリキーの作品等を通して、次第にプロレタリア作家としての自覚を持つようになっていきます。昭和三年には、代表作の「防雪林」や「一九二八年三月十五日」を発表。名作「蟹工船」の執筆にも取り掛かります（翌四年発表）。「一九二八年三月十五日」と「蟹工船」は、国際革命作家同盟の機関誌「世界革命文学」に訳載され、小林多喜二の名は国際的にも知られるようになりました。

しかし、一方で共産主義に接近していた多喜二は、昭和五年に上京後の活動で二度官憲に検挙されています。その後に共産党へ入党し地下生活に入りますが、昭和八年二月二十日、東京赤坂で街頭レポ（非合法政治活動）の途中に特別高等警察に逮捕され、三時間にも及ぶ特高刑事の執拗（しつよう）な取り調べによりこの世を去りました。日本が国際連盟を脱退し、第二次世界大戦への軍靴の響きが、耳元に聞こえそうな世情下での事件でした。

今年は多喜二没後六十周年。先月二十日と二十一日には、多喜二碑保存会、日本民主主義文学同盟それぞれが記念のつどいを開催し、市教育委員会では生家跡（川口郵便局向かい）に文学碑（上写真）を設置しました。

↑下川沿駅前にある生誕の地碑。昭和32年に、川口集落各戸の拠金で建立されたものです。

多喜二の作品の中には大館地方独特といえる方言がいくつもみられます。「故里の顔」（文学碑）にある「みやッこ」がそうですし、他の部分に出てくる「泣きべちょ」、裏のほうを指す〝かぐぢ〟のことであろう「角地の旦那」などもそうです。ある意味でどの作家よりも郷土的作家といえそうな多喜二。没後六十年を経た今、その時を越え、思想を超えて、この人物を見つめ直したい気がします。

➡多喜二の著書

【プロレタリア】資本主義社会において、生産手段を持たず、自己の労働力を資本家に売って生活する賃金労働者の階級。またその個々の労働者をも指す。↔ ブルジョア。〔――文学〕プロレタリアの生活に根ざし、現実を階級的立場から描く文学。